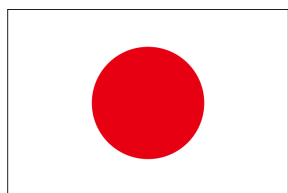


オーストラリア・ケアンズ語学留学及び
障がい者施設・学校ボランティア
・インターンシッププログラム

～福祉と教育の視点から見た
オーストラリアと日本の違いと課題～



大平 智也

東北福祉大学 教育学部教育学科初等教育専攻
宮城県 仙台市

1 はじめに

私はオーストラリア クイーンズランド州 ケアンズにおいて語学留学及びボランティアインターンシップに参加した。ホームステイでは David, Heidi 夫妻の家で生活をし、語学学校に2週間、ボランティアとして ARC Disability Services, セーリング, St Joseph's primary school に行かせていただいた。3週間生活する中で感じたこと、人との出会い、日本でも関わっている福祉・教育に携わり、オーストラリアのいいところ、日本の課題であるべきところを論じていく。

2 目次

P2 渡航目的, 理由, 動機

P3 日程

P3 第1章 オーストラリアでの人との関わり～異文化とのふれあい～

P4 第2章 オーストラリアの人に対する考え方～障がいと人種～

P5 第3章 福祉現場で働く人の専門性と障害のある方に対する関わり方

P6 第4章 インクルーシブ教育の実現とは

～日本とオーストラリアの小学校の違いに着目して～

P7 第5章 日本の働き方改革に向けて～小学校の時間割に着目して～

P8 語学学校の報告

・まとめ

3 渡航動機

・日本の小学校で英語の授業が必須になったことを受け、将来自分が教える立場になったときに教えられるように英語の習得をしたいと思ったため。

・日本の特別支援教育を撤廃し、インクルーシブ教育に移行するように国連からの通達が出たが、海外はどのようにしてインクルーシブ教育を導入しているのか知りたかったから。

・異文化に触れ、体験したいと思ったから。



4 日程

<期間> 2023 年 2 月 16 日 (木) ～2023 年 3 月 9 日 (木)

<行程>

日付	主な出来事
2/16	成田国際空港 20 時 05 分発 JQ26 便 ケアンズ行き
2/17	ケアンズ国際空港 4 時 25 分着→遅延により 6 時 30 分着
2/20	OHC (Oxford House College) English school 入学
3/3	OHC English school 卒業
3/6	ARC Disability Services 参加
3/7	セーリング参加
3/8	St Joseph's primary school Volunteer
3/9	ケアンズ国際空港 11 時 10 分発 JQ25 便 成田行き

5 第 1 章 オーストラリアでの人との関わり～愛を持つこと～

初めてのオーストラリア, 初めてのホームステイでとても緊張していた。空港へ着くとホストファミリーが出迎えてくれた。出会った瞬間安堵した。ホストファーザーのデイビットは自ら進んでキッチンに立ち料理をしたり, お皿洗いをしたりしていた。日本では男性が家事への参加問題が取り上げられているがデイビットは平然とやっていたのだ。いつも私がお礼を言うと「Don't worry!」と返してくれた。それがとてもうれしく感じた。初めてバスに乗ったときには降りるバス停を運転手さんや近くにいた人が教えてくれた。バスに乗るとき「Hello」「How are you?」, 降りるときには「Thank you!」を必ず言っている。これがとても気持ちよかった。誰にも平等に接しているような姿が平然とされており, その姿が暮らしやすさにつながっているのだろうと考えた。ここで感じたことが「愛」だ。愛には色々な意味があるが他人に対する愛が日本人よりも多い気がした。これを感じたのが 2 日目に行ったパーティーの出来事だった。

初めてのオーストラリアでのパーティーで緊張していた。そこには 20 人を超える人々が集まった。その一人一人と自己紹介をしたのだが, 握手, ハグ, キス, 相手の手の甲を額につけるなどそれぞれの国によって挨拶の仕方が違った。驚きと同時に異文化に触れることができ, 人の温かさを感じた。この瞬間居心地がいいなと思い, オーストラリアでの暮らしがとても楽しみになった。帰る時にも別れを惜しみまた会おうねなどとあいさつをする。そのちょっとしたことが嬉しい。日本でいきなりそのようなことをするとびっくりされると思うが愛を持つこと, 伝えることはできる。愛を持ち, 愛を伝えられる人に私はなりたいと思う。

6 第 2 章 オーストラリアに住む人の考え方～障がいと人種～

生活している中で LGBTQ の理解と障がい者理解に寛容な国だなと感じた。日本では人

の目線を感じて生活し、それに苦しむことがある。オーストラリアでは「障害があるからできない!」「人への愛し方がどうこう」という考え方がないように思う。バスに乗っているときに子どもたちが優先席に乗っていた。途中で盲導犬を連れた視覚障がい者の女性が乗ってくるとさっと席をよけていた。見た感じ 5 歳くらいの子どもだ。私はその姿にびっくりした。

一方で人種差別を目の当たりにした。よく言われたのが「アボリジニは危険だから気をつけなさい」「彼らは夜に危険だから話しかけられても話さない」ということだ。そのようなことを言われると怖かったのでその通りにした。話しかけられても話さなかった。話を聞いても観光客がアボリジニから被害を受けることも多いらしい。だが私は一概にアボリジニが怖いと決めつけるのはおかしいのでは?と思うことがあった。夜バスに乗っているときのこと。私以外の乗客はみんなアボリジニの人たちだ。彼らは大声で騒いでいた。「怖い」「早くおりたい」その思いでいっぱいだった。オーストラリアのバスは日本とは違い、アナウンスなどはなく、バス停が近くなったらボタンを押して降りるシステムだ。夜になると暗くて全くわからない。どこだろうとおどおどしていると一人のアボリジニの方に声をかけられた。

「Where do you get off?」

私は怖かったので聞こえないふりをした。でもその方はずっと私のほうを気にかけてくれていたのが分かった。二回目にまた同じように声をかけられた。怖かったけど答えた。

「I would like to get off to Grevillea. But I can't get off because it's dark.」

何を話したのか緊張で覚えてないがこのような内容で話した。するとその方はバス停が近くなるとボタンを押してくれた。そして挨拶をしてバスを降りた。私はこの出来事からアボリジニだから話さない、関わらないというのは違うのではと感じた。

小学校でも個人情報のところに障がいのことのほかにアボリジニの子どもにはアボリジニと書いてあった。差別というわけではないがそういったことも記載されているのが驚いた。障がい者理解に寛容なオーストラリアこそ、人種差別があることに悲しくなった。日本で人種差別は問題にはなっていないが、海外では実際にあるということを子どもたちに伝えていき、自分たちと関係ない問題ということではなく、考えるきっかけを作っていければいいなと考える。



写真 バス停の朝の様子

- ・バス停のアナウンスがない
- ・頻繁に遅れる…

日本のバスとの違いに驚き

7 第3章 福祉現場で働く人の専門性に関わり方

3月6日に ARC Disability Services を見学した。見学する中で日本の施設と同じところもあれば異なる点もあることに気が付いた。



ARC の施設には PC ルーム、カフェ、演劇ができる設備などが設置されている。その他にも楽器があったり、娯楽のものがあつたりする。その中で利用者ができることがたくさんあり、脚本作りや演劇、カフェでの仕事などや日によってはゴルフ、セーリングなど様々だ。日本の生活介護

の施設だと毎日同じことの繰り返しや利用者がやりたいことができないこと、できることが限られていることが多い。だが、やりたいことを選んでできることで利用者の人たちがと



ても楽しそうに生活をしていた。“障害があるからできない”のではなく“できないことがどうやったらできるのか”というのを職員全員が考えているように思えた。ドアノブが壊れた時にドリルを持ってくると「誰かやってみる？」と声をかけ利用者が治していた。こうしてできることがどんどん増えていけば利用者自身もいろんなことにチャレンジしたくなるの

だろう。日本人に足りない考え方というのが“障害があるからできない”のではなく“できないことがどうやったらできるのか”ということだと気づいた。誰か一部ではなくて日本全体でこの考え方をしていく必要がある。その考え方こそがインクルーシブな世界を作り出すきっかけになっていく。

支援していく者としての心構えとして「チャレンジさせてみる挑戦心と失敗しても怒らない」ということが大切だ。この心構えこそが ARC の職員が表していた彼らの仕事への姿だと思う。彼らからしたら私は“外国人”である。外国人だからやらせない、仲間に入れないではなく「一緒にやろう！」と誘ってくれる温かさがとてもうれしかった。

3月7日にはセーリングのプログラムに参加した。車椅子の方を船に乗せるために使うリフトの使い方を見ていると当事者自身のニーズに合わせて微妙に力のかけ方を変えたり、



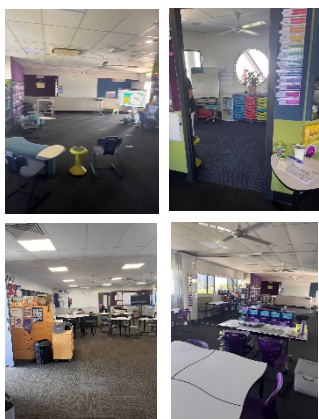
スピードを変えたりしていて、当事者の意見を聞くこと、プログラムに取り入れることの大切さを学んだ。やはり障害を壁にしない考え方が彼らの QOL の上昇に繋がっていることを再認識することができた。

8 第4章 インクルーシブ教育の実現とは

～日本とオーストラリアの小学校の違いに着目して～

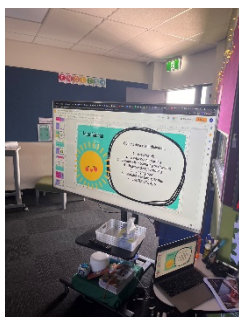
<日本との違い>

- ・2クラスがくっついたような大きな教室
- ・教室構造はラフな感じ、ソファがあったり、大きな椅子があったりとバラバラ
- ・教室の中に小さな教室があり個別指導が可能
- ・先生はマイク着用、端まで聞こえるようにスピーカー付き
- ・一学年につき一人のサブティーチャー
- ・すべての授業をオンラインで配信



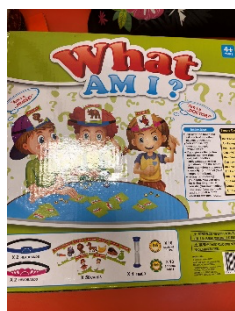
3月8日に St Joseph's primary school Volunteer に行った。内容は英語の授業に参加したり、体育の授業に参加したりした。学校見学をしている中で驚いたことは教室の構造である。1クラス30人程度の学級で1学年2クラスであった。教室に入るとその広さに驚いた。教室に少しの仕切りがあるくらいで2クラスがつながっているような構造だ。日本のように机がびっしりと並べてあるわけではなく、ソファがあったり椅子があったり、置き方もバラバラだった。そして教室の中にさらに小さい教室が併設されていた。何のために小さい教室は使うのかな？こんなのバラバラで指示は通るのかな？いろいろな疑問が浮かんた。だが授業が始まった瞬間すべてが明らかになった。

二時間目の英語の時間に英語専科の先生とともに5年生の教室に行った。するとフルーツブレイクの最中であつたため読み聞かせの時にリンゴをかじったり、バナナをかじったりしていた。中には先生の近くにいない人もいた。だが先生を見るとマイクを付けていた。教室のどこにいても聞こえるようにと聴覚障害のある子どものための配慮でもあるということだった。日本だと先生の近くに來ない子には「先生の話聞けるここに来なさい！」と怒る先生もいる。子どもの中にも大人数が苦手な子もいるのに。このオーストラリアのやり方だと教室のどこにいても話を聞くことができ、場所は違っても自分の受けたいところで勉強や話を聞くことができる。読み聞かせが終わると授業が始まった。2クラス合同で授業する



ことも多く2人の担任と1人のサブティーチャーで授業をしていた。教室には大きなモニターがあり、先生のパソコンと Bluetooth でつながるようになっていた。児童も一人一台タブレットを持っており ICT を使用した授業展開がなされていた。話を聞くと10年前より ICT の導入をスタートしたという。多額の費用が掛かったがコロナもあり、早く導入してよかったと先生は話していた。授業の導入が終わると英語専科とともに小さい教室に入っていく児童が何名かいた。その子たちは LD や ADHD の子たち等で個別指導学習をしていた。だが、内容はみんなと同じである。専科の先生が分かりやすいように説明したり、簡単なアプローチで指導したりしていた。6年生の、有名人のことをまとめて伝記にする単元で少人数グループではワークシートを用

いて順序的に書けるように配慮されていた。これが真のインクルーシブ教育なのかと感じた。日本だと特別支援学級と原級ではやっていることが違ったり、まったく別の組織のような感じで動いたり、という感じだがオーストラリアは場所もやっていることも一緒だ。「障害があってもみんなが同じことを学ぶ」まさにインクルーシブそのものだった。あの環境だからこそ可能だが、日本でそれを実践するには環境を変えない限り難しいだろうなと思った。



オーストラリアは多民族国家である。そのため海外から来た子どもも多い。インドから来豪して6か月の5歳の男の子の英語授業にも参加した。英語のコミュニケーションなどを授業した後、その子は授業動画を見始めた。担任が配信したその日にやることの動画だ。個別指導を受けている中でも授業が遅れないようにするための配慮だ。これもインクルーシブだなと感じた。動画が終わるとカードゲーム「What am I」をして英語を学んだ。自分自身もとても楽しく学ぶことができ、ゲームを用いた英語教育は効果があり楽しく学ぶことができると感じた。

日本でのインクルーシブ教育の導入に向けてできることを考えてみた

- ・専科や特別支援学級担任との連携
- ・支援員の配置、サブティーチャーの配置
- ・机の位置などをフリーにする（自分の受けたいところで受けられる環境）

難しいと思うが海外の教育環境を視察して学び、日本に導入していければいいなということを感じた。

9 第5章 日本の働き方改革に向けて～小学校の時間割に着目して～

- ・フルーツブレイクがあること
- ・2回のランチタイムで先生の休憩時間が保証される



これは5年生の時間割である。日本と違う点がいくつかある。まず、フルーツブレイクという時間があり所謂おやつ休憩だ。児童たちがリンゴやバナナをかじっていた。これがあることで空腹で集中できないということが少なくなる。

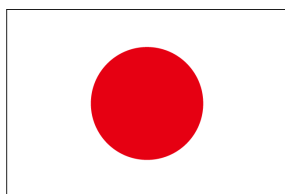
もう一つはランチタイムが二回設けられている。給食がないからできることだが、先生もどっちは子どもを見てどっちは休憩できる。二回あることで休憩が確約されるのだ。日本では先生の休憩がない！と言われているがオーストラリアではこのようにして先生の休憩のことも考えられていることに気付いた。日本より休憩時間は短いものの子どもにも先生にも良い時間になっているので日本でも考えてほしい。

10 語学学校の報告

2週間 OHC English schoolに通った。日本人の学生が多かったものの、ブラジル、インド、チリ、コロンビア、韓国、タイなど様々な国の人たちと関わる事ができた。文化も違えば言葉も違う中、英語という共通のツールがあればコミュニケーションができることがとても楽しかった。放課後にはプールやバーに行ったり、土日には遊びに行ったりできて充実した生活を送れた。学校で行ったパーティーではそれぞれの国のものを食べることができ異文化を知ることができた。逆に日本の文化を伝えることができてよい交流となった。これからもっと英語を勉強したい！と思えることができた。

11 終わりに

ケアンズでの生活は私にとってかけがえのない財産になった。日本と教育・福祉の面での違いや様々なことに気付くことができた。そして関わってくださった人々の優しさに何度も救われた。この学んだことを日本での生活、そして教員になったときに生かしていきたい。インターサポート浦沢さん、現地コーディネーターの Dolly, ボランティアの関係各位、ホストマザー、出会ったすべての友達に感謝します。友達のおかげで楽しい生活を送ることができました。またいつかどこかで皆さんに会えることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。

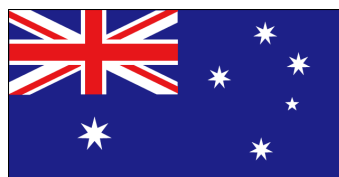
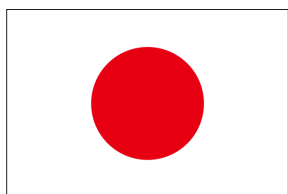


The best memories! Thank you!



English Study and School Volunteer Internship Program in Cairns, Australia

**~Focusing on educational, welfare issues in Japan
from the viewpoint of differences between
Australia and Japan~**



Tomoya Ohira

**Tohoku Fukushi University
Faculty of Education
Sendai, Miyagi, Japan**

1 Introduction

I participated in a language study and volunteer internship program in Cairns, Queensland, Australia. I lived with a host family, David and Heidi, went to a language school for two weeks, and volunteered at ARC Disability Services, sailing for the disabled, and visiting St. Joseph's primary school. I will discuss what I felt, the people I met, my involvement in welfare and education in Japan, the good points of Australia, and the challenges in Japan.

2 Reasons for joining the Cairns program

I wanted to learn English so that I can teach it when I am in a position to teach in the future. Also, I wanted to experience different cultures overseas.

3 Schedule

Thursday, February 16 - Thursday, March 9, 2023

Date	Major Events
2/16	Narita International Airport 08:05pm on JQ26 to Cairns.
2/17	Cairns International Airport 4:25pm → 6:30pm due to delay
2/20	OHC English School Enrollment
3/3	Graduate from OHC English school
3/6	Participate in ARC Disability Services
3/7	Participate in Sailing
3/8	Volunteer St Joseph's primary school
3/9	Cairns International Airport 11:10am on JQ25 to Narita

4 Relationships with people in Australia

It was my first time in Australia and my homestay, so I was very nervous. When I arrived at the airport, I met my host family. I was relieved at the moment when I met them. David, my host father, was willing to stand in the kitchen and do the cooking and washing the dishes. In Japan, the issue of men's participation in household chores has been discussed, but David was doing it

without any trouble. Whenever I thanked him, he would reply, "Don't worry! That made me very happy." When I got on the bus for the first time, the driver or someone nearby kindly told me where to get off. I always said "Hello" and "How are you?" when I got on the bus, and "Thank you!" when I got off. This was a very pleasant experience. I thought that this attitude of treating everyone equally must have led to the ease of living in the city. What I felt there was "Love". Love has many meanings, but I felt that there was more love for others than in Japan. I often felt this kind of love at parties during the stay.

5 The way of thinking by people living in Australia ~from the viewpoints of disability and race~

While living in Japan, I felt that the country is not so tolerant of LGBTQ and people with disabilities. In Japan, I live my life feeling the way people look at me, and I sometimes suffer from it. In Australia, on the other hand, people clearly say, "I can't do it because of my disability!" I think there is a "how to love someone" mentality in Australia. One day, when I was on the bus, children were sitting on the priority seats. When a visually impaired woman with a guide dog got on the bus, one of them quickly moved out of the way. She looked to be a child of about five years old. I was so surprised to see her behavior.

On the other hand, I sometimes witnessed racial discrimination. I was often told to be careful of Aborigines because they are dangerous, and not to talk to them at night because they are dangerous. I was scared when I was told such things, so I did as I was told. Even if they talked to me, I did not talk to them. I heard that tourists are often deceived by Aboriginal people. However, I sometimes wondered if it was wrong to assume that Aborigines were scary in general. There was one time when I was on a bus at night. At that time, all passengers except me were Aboriginal people. They were making a lot of noise. I was filled with the thoughts of "I am scared" and "I want to get off the bus as soon as possible. Buses in Australia are different from those in Japan in that there are no announcements, and when the bus stop is near, you press a button to get off. At night, it was too dark to see things outside of the bus at all. When I was frightened and wondering where I was, an Aboriginal man approached

me and said, "Where do you get off? I was scared, so I pretended not to hear him. But I could tell that he had been paying attention to me for a long time. The second time, he called out to me again in the same way. I was scared, but I answered. "I would like to get off to Grevillea, but I can't get off because it's dark." I was so nervous that I don't remember what I said, but it was something like this. Then, when the bus stop was near, the person pushed the button. We said hello and got off the bus. This incident made me feel that it is not right to say that I do not speak or get involved with Aboriginal people because they are Aboriginal.

At the elementary school, Aboriginal children were written "Aboriginal" too in the personal information section, in addition to disabilities. I was surprised to see this kind of information, although it is not necessarily discriminatory. I was saddened to see that in even Australia, a country that is thought to be tolerant of people with disabilities, there is a racial discrimination. I hope that we can tell our children that racism is not only a problem in Japan, but that it does exist in other countries, and that we can create opportunities for them to think about it, rather than thinking of it as a problem that has nothing to do with them.

6 The professionalism of those who work in the social service field and how they relate to people with disabilities.

On March 6, I visited ARC Disability Services. During the visit, we noticed that some of the facilities were the same as those in Japan, but there were also some differences.



The ARC facility includes a PC room, a café, and facilities for theatrical performances. There are also musical instruments and recreational items. There are many things that the residents can do, such as script writing, put on plays, work in the café, golf, do sailing, etc., depending on the day.

In Japanese daily nursing care facilities, residents often repeat the same things every day, or they are not allowed to do what they want to, or what they can do is often limited. However, in the ARC facility the users seemed to be enjoying their lives by being able to choose and do what they wanted to do. It seemed to me that all the staff were thinking about "how they can do what they cannot do" rather than "they cannot do what they want to do because of their

disabilities." When a doorknob was broken, the staff brought a drill and asked, "Who wants to try?" And one user was able to fix it. As the number of things they can do increases, the users themselves will want to try various things. I realized that what is lacking in the Japanese way of thinking is not the idea "I can't do it because I have a disability," but the one "How can I do what I can't do?" It is necessary for Japan as a whole to adopt this way of thinking, not just part of the country. This way of thinking will lead to the creation of an inclusive world.



As a person who provides support, it is important to have the mindset where people "can try anything themselves and the staff don't get angry when they might make mistakes." I believe that this attitude is what the ARC staff expressed in their work. From their point of view, I am a foreigner. But they do not say, "Since you are a foreigner, you are not allowed to do this work,"

but rather, "Let's work together!" I was very happy to see their warmth.

On March 7, I participated in a sailing program. I learned the importance of listening to the opinions of the people involved and incorporating them into the program. I was also able to recognize that the concept of not letting disability be a barrier has led to an increase in their quality of life.



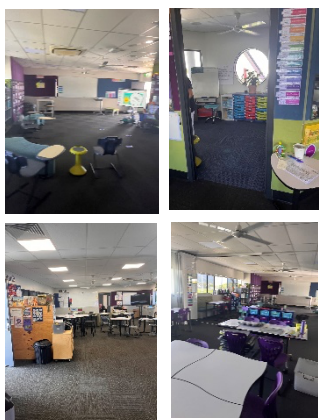
7 What is the Realization of Inclusive Education?

~Focusing on the Differences between Japanese and Australian Elementary Schools~

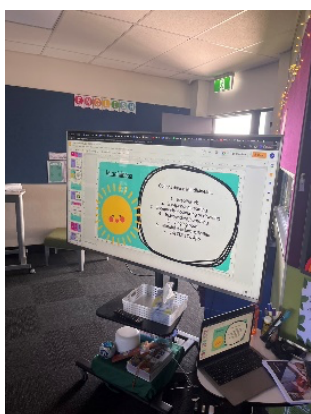
<Differences from Japan>

- The classrooms are large, with two classes attached to each other.
- The structure of the classroom is rough, with sofas and big chairs in different places.
- There is a small classroom for individual instruction inside the classroom.

•Teachers wear microphones and have speakers so they can be heard all the way to the end of the room.



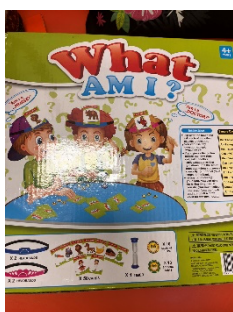
On March 8, I went to St. Joseph's primary school as a volunteer. We participated in English class and physical education class. During the school tour, I was surprised by the structure of the classrooms. They have two classes per grade with about 30 students each. When I entered the classroom, I was surprised at how spacious it was. It was as if the two classes were connected to each other, with only a few partitions between them. There were sofas, chairs, and other furniture in different places. There was also a smaller classroom attached to each classroom. What is the smaller classroom used for? Would the instructions be understood in such a disjointed way? Various questions came to mind. But everything became clear the moment the class started.



During an English class in the second period, I went to the 5th grade classroom with an English teacher. It was the middle of a fruit break, so the students were biting apples and bananas during the reading time. Some of them were not near the teacher. But when I saw the teacher, I noticed he had a microphone on. I was told that this was a consideration for hearing-impaired children so that they could hear the teacher from anywhere in the classroom. In Japan, some teachers say to children who do not come near the teacher, "Come to where you can hear what the teacher is saying!" Some of them get angry with children who don't come close to them. I wonder if some children do not like to be in large groups. With the Australian method, students can listen to the teacher anywhere in the classroom, and even if they are in different places, they can study or listen to the teacher where they want to. After the storytelling, two sections of the class started in the same classroom, with two homeroom teachers and one sub-teacher together. There was a large monitor in the classroom, which was connected to a teacher's computer via Bluetooth. Each student had a tablet, and the class was being developed using ICT. One of the teachers told us that

they started to introduce ICT 10 years ago. The teacher said that although it cost a lot of money, it was a good thing that they introduced ICT as soon as possible because of Corona. After the introduction of the class, some children entered the small classroom inside with one English teacher. These were children with LD, ADHD, etc., and they were doing individualized learning with the teacher's support. The content, however, was the same as everyone else's.

In another unit on biographies of famous people for the 6th grade, some worksheets were used for small groups so that the students could work together in a sequential manner. I felt that this was true inclusive education. In Japan, the special-needs class and the original class are different, or operate like completely different organizations, but in Australia, the location and what they do are the same. It was possible only in that environment, but I thought it would be difficult to put it into practice in Japan unless the environment is drastically changed.



Australia is a multi-ethnic country. Therefore, many children come from overseas. I also participated in an English class for a 5-year-old boy who had come to Australia from India for 6 months. After the lesson on English communication and other topics, the boy started watching a video of the class. It was a video of what he would be doing that day, delivered by his homeroom teacher. This was done so that he would not be left behind for class even though he was receiving individualized instruction. I felt this was also inclusive. After the video, the students played the card game "What am I" to learn English. I enjoyed learning English with him very much myself, and felt that English education using games is effective and fun.

I thought about what we can do to introduce inclusive education in Japan.

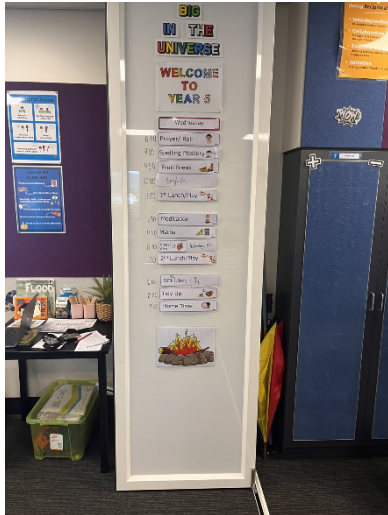
- Cooperation with special instructors and special-needs classroom teachers
- Assignment of supporting staff and sub-teachers
- Freeing up desk positions, etc. (An environment where students can receive education anywhere inside the classroom.)

Although it may be difficult, I felt that it would be good if we could visit and learn from overseas educational environments and introduce them to Japan.

8 Toward Reforming Japan's Work Styles - Focusing on the Elementary School Timetable

We can take two interesting points:

- Fruit breaks to fill small stomachs
- Two lunch period setting that guarantee a break for each teacher.



This is a timetable for 5th graders. There are several differences from Japan. First, there is a fruit break, which is a so-called snack break. The students were nibbling on apples and bananas. This makes it less likely that students will be unable to concentrate due to hunger.

Another is that there are two lunch breaks. This is possible because there is no school lunch, and the teachers can take a break while one of them watches the children. By having two lunch breaks, the teachers are assured of a break. In Japan, it is

said that there are no breaks for teachers! In Australia, however, I noticed that this kind of break is also taken into consideration. Although the breaks are shorter than in Japan, they are good for both the children and the teachers, and I hope that this will be considered in Japan as well.

9 Language School Report

I attended OHC English School in Cairns for two weeks. Although there were many Japanese students, I could communicate with people from Brazil, India, Chile, Colombia, Korea, Thailand and many other countries. I enjoyed the fact that we could communicate with people from different cultures and languages using English as a common tool. After school we went to the pool and bars, and on weekends we went out for fun, so I was able to lead a fulfilling life. At the parties held at the school, I was able to eat food from different countries and learn about different cultures. It was also a great opportunity for me to share my Japanese culture with them.

I want to study English more in the future!

10 In conclusion

My life in Cairns was an irreplaceable asset for me. I was able to notice the differences between Japan and Cairns in terms of education and welfare, as well as many other things. I was also helped many times by the kindness of the people I met. I would like to use what I have learned in my life in Japan and when I become a teacher.

I would like to thank Ms. Urasawa at Inter Support in Sendai, Dolly, the local coordinator, all the volunteers, my host family, and all the friends I met.

Thank you very much.

